
エールヴェリオが泣いた日

英 憲乃丞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エールヴェリオが泣いた日

【Nコード】

N1968W

【作者名】

英 憲乃丞

【あらすじ】

世界最大の陸土を持つ大陸ルシオール。

六つの国からなるその大陸において圧倒的な軍事力を持ったグランヴェーネ帝国は現皇帝ファリウスの元、大陸全土の侵略に乗り出した。

他の国々が帝国の前に危惧する中、既にその帝国の領土に落ちた一つの国が今小さく反逆の狼煙をあげる。

一陣の風（前書き）

拙い文章、そして投稿後の度重なる改変、申し訳ありません。
こんな作品ではありますが、最後までお付き合い頂ければ幸いです。

一陣の風

大草原を眼下に望む小高い丘の上、漆黒の毛並みが美しい麗馬に跨り、両手を丸めて作った双眼鏡で今まさに衝突せんとする両勢力を傍観する一人の優男。

「方や100を超える帝国の精鋭騎士、方や装備も儘ならない30足らずの領民兵。この戦、誰がどう見ても後者に勝ち目は無し……と」

本来女性が使うそれであろう空色のリボンを用い頭の後ろで一本に束ねた茶混じりの長い金髪と、深緑色の長外套が時折吹く強い風になびいている。

「行こう、ジェニー」

丸めていた手を崩し変わって麗馬の手綱を強く手繰り寄せると、麗馬は前足を高らかに上げ大きく嘶いた。

それに呼応するように背後にそびえる雄大なセレニア連山から吹き降ろしの冷たい風がビュウツと鳴き草原地帯を今日一番に激しく揺らす。

次の瞬間、複数からなる馬の嘶きと金属同士の衝撃音、そして怒号といって余りある両軍の兵達が放つ威圧的な雄たけびが大草原に轟響した。

「我らが領主様の御宝を愚かしくも強奪した大罪、貴様ら愚民の命を以ってしても償いきれぬと知れ……！」

一方の軍勢は一樣に、磨きぬかれた銀の全身鎧に銀の大盾、鋭く鍛え上げられた特注の騎士剣で統一され、前後数人が木槍の先に掲げる“交わる紅銀の二匹竜”の旗印が疾駆する騎馬の上で大きく風にたなびいている。

「うるせえ！ だいたいこの財宝はもともと俺たちが汗水垂らして得た金だろうが！」

もう一方の軍勢、とはいえ人数にして20数名。装備といっても、ある者は朽ちかけた革製の胸当て一枚、またある者は鉄鍋の蓋と見紛うほどに粗末な盾、得物も得物で使い古された木槍や刃こぼれが目立つ鉄剣、仕舞には農具のようなものまで垣間見える。

まさに犬狼に狩られんとする野兎の構図だ。

それでも、そんな野兎の立場にあっても誰一人としてその表情に諦めの色は一切無い。

その中でも一際奮起する中年と呼ぶにはいくらか早い巨漢が一人。煤汚れたバンダナを額から上できつく結び、無精髭を風に揺らしながら雄雄しく鉄剣を振るう。

「血も涙も無えお前らの“領主様”のおかげで俺達や明日食う飯すら困ってんだ！！」

「ふん！ 知ったことが、年貢を納められん者は例外なく国家反逆とみなし処刑する！」

馬上で互いの得物を激しくぶつけて競り合う両者。

巨漢は剣の技術など一切関係なく腕力のみで対峙する銀の手甲から騎士剣を青空へ弾き出すと、決して上等とは言えない鉄剣で間髪

入れず甲冑の腹部目掛けてガツンと横薙ぎの一撃を加えた。

腹を押さえて落馬する甲冑を横目で流し、巨漢は周囲を見回し戦況を確認する。

明らかに劣勢、犬狼の凄まじい猛攻に防戦一方の野兎の将は現状を打破する術を必死で模索しようとするが鉄と鉄がぶつかり奏でる不協和音が思考を遮る。

ふと巨漢は背負っていた布袋を一瞬見やった。

土埃を被ったお世辞にも綺麗とは呼べない布袋の中からは、その外身を裏切るように光り輝くものが僅かに姿をのぞかせている。

キン！

その刹那、不意を付かれた巨漢の得物は騎士剣に弾かれ宙を舞い、対峙する銀の甲冑の振り上げたそれが陽光を帯びてギラリと輝く。

冷たいものが額から頬へと伝わると、巨漢は険しかった瞳をスツと閉ざした。

（ファシア、すまねえ）

と、その時だった――

一陣の猛烈な旋風が目の前を通り過ぎ、銀の甲冑を風ぎ払ったのだ。

巨漢は手綱を引き寄せ、突然の出来事に暴れる馬をなんとかいなすと地に伏す甲冑を見る。

甲冑にはそれが銀製と忘れる程の深い斬痕が刻まれていた。

「なんだ！？ 一体何が……」

巨漢は訳もわからず通り過ぎた旋風の軌跡を目で追った。

「少、年……！？」

舞い上がった粉塵と草花のベールの先にあつたのは美しい黒馬とそれに跨がる青年と呼ぶには幼さが残る一人の若者の姿だった。

若者は巨漢の方に一度目をやると再び黒馬の手綱を引き寄せると草原を所狭しと疾駆し、甲冑に反撃の暇を与える事なく次々と凧ぎ払っていく。

——その姿はまさに、青空の元吹き荒れる春の嵐のように——

「ウソだろ、おい……」

一刻後、目の前の広がる光景に思わず溢す巨漢。

突如現れた一人の若者と一頭の黒馬によって犬狼と野兎の立場は瞬く間に逆転。

未だ草原の中で馬上に残っている甲冑の数は片手で数えられるまでになり、若草のベッドに一樣に眠る残りの大多数の甲冑を他所に、解放された騎馬達は草を食んだり気ままに走り回っている。

「くそ、なんなんだあの外套の男は！ あんなのがいるなんて聞いてないぞ！！ これは悪夢だ…… そうに違いな——」

言いかけて、一人の甲冑は背後の存在に気付いて声を詰まらせた。背後には既に麗馬の姿。

「ひいひい！！で、出た……」

「お前らはその綺麗な剣でいたいどれ程の民を、罪のない人達の命を奪った？」

若者は冷たく鋭い眼差しで問う。

「し、知るか！！わ、我らは領主様の、延いては皇帝陛下のために剣を振るっているのだ、帝国に仇なす愚民どもは存在事態が罪なのだっ！」

その騎士剣を外套の男の前でブンブンと無闇に振り回す甲冑、その様子に言葉ほどの余裕は無いようだった。

「愚かだな」

一言呟いて若者は右腕を天にかざした。
まるで周囲の気そのものが若者に呼び起こされるかのように、かざした腕には輝く翡翠色が螺旋を描いて集結する。

「は、はひいひい！！」

先程までの威勢はどこへやら、情けない悲鳴を上げながら銀の甲冑達は慌てて騎馬の手綱を強く引き上げる。

すると荒い扱いの乗手に憤慨の意を示さんばかりに嘶き暴れ狂う騎馬。

言葉にならない言葉を残して、草原に残された数名の甲冑は暴れ狂う馬に必死でしがみついて一目散に草原の彼方へと退散していく。

そんな光景をどこか悲壮感を含ませて眺める若者。
振り上げた腕に纏っていたそれは既に消滅していた。

「こりゃあ、夢か……？」

未だ呆気にとられる巨漢。まるで嵐が去ったあのような静けさが草原を包み込む。と、

「ダイスの旦那あ……！」

草原の向こうから巨漢を呼び馬を走らせてくる野兎の仲間達。

「おう！ 無事かお前ら……！」

「はい、なんとか……しかし、あの黒馬は一体」

草原の一角にぼつんと一人、黒馬の上に佇む若者の存在を遠目で
見やる。

すると次の瞬間、ふらつと揺らいた若者は黒馬から草原へと崩れ
落ちた。

「おい…… あんた……！」

慌てて馬を走らせ駆け寄る巨漢達。

「あんた……！ 大丈夫か、しっかりしろ……！」

巨漢の問いかけにも若者は目を覚ます様子はない。

「大丈夫だ、息はある。気を失っているだけらしい……」

「この兄ちゃん、どうするんですかい旦那？」

仲間の問いに巨漢は怒鳴る。

「バカ野郎！ こんな草原のど真ん中に置き去りにしたら凍えて死
んじまう、それにこの兄ちゃんは事情はどうあれオレ達の命の恩人
だ」

そう言つと巨漢は若者をゆっくり抱き上げ自らの馬に乗せた。

「村へ帰るぞ野郎共！！ 俺達の戦いはこれから始まるんだ！！」

草原に横たわる銀の甲冑達を横目に見ながら、既に山の向こうに
沈みかける夕陽に向かって、野兎の一群は馬を歩ませる。

涼やかな風に草花が静かになびいていた。

まるで人間達が起こした喧騒とこの殺伐とした時代を悲しむよう
に――

繰り返される歴史

“ルシオール大陸”

世界地図の4割程を占める広大な陸土を持った世界最大の大陸の名である。

大陸には5つの国々が存在し、その領土を分かつていた。

“グランヴェーネ帝国”はその5大国の中で最も広大な領土、そして最も強大な軍事力を持った国である。

そもそも建国当初の帝国は他国に並ぶか、あるいは劣る程の軍力しか持たない――

性格に言えば持つ必要の無い平和と秩序を尊ぶ国であった。

しかし創世暦615年、時の皇帝“バーナーズ・ゲシュト・グラ・ンヴェーネ4世”はその狂気に満ちた支配欲と好戦的な性格から、軍事力を次第に拡大させていく。

元々の土地柄から鉱山を多く持つ帝国は、元来鉄や鉱石を用いた工芸品や農工具といった日用品の精製、輸出によって国益を潤滑させていた。しかしバーナーズ戴冠以後、貿易は完全に封鎖され職人達に課せられたのは刀剣をはじめとする武器防具や戦争道具の精製だった。

国内財政を捨ててまでも“力”を得ようとしたバーナーズはいつしか国内外から狂皇、愚皇の異名で呼称されるようになった。

それでもバーナーズには名称など不要なもの。

止まることの無い野心は、それまで帝国には存在しなかった守国、対国戦の要である“騎士団”を設立しその兵力を大陸一へと拡大、また名だたる軍師や傭兵を使い、騎士個々の剣術や馬術の向上のために国民の血税を裂いていった。

そして創世歴620年、皇帝バーナーズはその圧倒的な国力を以てして他国への侵攻を開始。隣接国を次々と支配下に置いていった。

そんな帝国の暴虐に対して他の諸国は共に旗を上げ“ルシオール救世同盟”を設立、各国の精鋭は集結し帝国に対して反旗を翻したのだ。

しかし……“鬼将”の名を持つ帝国騎士団長ベルガシヤルテ率いる帝国軍を前にして仮組の急造軍に勝機はなく、ついには救世軍の内部分裂により帝国の侵攻は更に拡大、大陸は帝国の手に堕ちようとしていた。

そんな時、大陸中にある衝撃が走った。

——バーナーズの死亡——

確固たる礎を失った帝国軍は、分裂しながらも最後まで大陸のために残り奮迅した救世軍の将ジェナス・ローゼンハイム率いる一軍の元に敗北、その規模は瞬く間に縮小し救世軍は勢いそのままに帝国領土へ進軍、“帝都ヴェーネ・セイレ”を陥落させ残すは皇城のみとなった。

皇城へ攻め入ろうとしたその時だ。数百の騎馬が取り囲む最中に一人現れたのは故バーナーズの妻、皇后シルフレッタその人だった。

皇后は薄汚れたドレスを纏い群衆の前に頭を垂れた。

「亡き皇のこれまでの非道に許しを乞おうとは申しません。ただ願わくば、この不肖シルフレッタ・グランヴェーネに今一度だけ、我が国の愚皇が犯した他国への罪を償う機会をお与え願えませぬでしょうか？」

ルシオール救世軍の中には帝国軍の手によって仲間を失った者、家族を亡くした者もたくさんいた。

突然目の前に現れた、果たして本当に皇后かも分らないこの女性が頭を下げたところで、救世軍騎士達の怒りは収まるわけもない。

誰も彼もがその女性を斬り捨てんとしたそんな中で、それでも仲間を制止する男の存在があった。

ジェナス・ローゼンハイム、ローゼンハイム聖王国の主である。代々神の御使いの名を冠してきた“聖王”は、その名に相応しく天使のような慈悲深い表情で、しかしその瞳の奥に救世軍の将としての強い思いを宿らせて皇后に問う。

「貴女に背負う事が出来るか？ この戦いで消えた万の民の、その命の重さを」

「はい。もし叶うならば私は、かつてのように帝国がこの大陸各国と和平の元に進展することができるよう、削身し尽力する事をこの弱命に誓います」

自国を混沌の泥沼から救うため、この女性もまた、その命を賭す覚悟は出来ている。

皇后の表情に一縷の希望を見た聖王は、一年間の停戦協定という“期限”を設けることで、狂皇が狂わせた歴史の齒車をこの女性が

どこまで立て直せるのか、それを見極めようと救国軍の同志達に提案した。

もちろん、その場にいる誰しもが納得の出来る事ではなかった。しかし、それでも一時は分裂し帝国の手が掛かり壊滅寸前へ追い込まれた救国軍を再起させた張本人であるジェナスの言葉は、帝国への怒りに吞まれ忘れ掛けていた“未来を生きる者達への希望”を救国軍の同志達に思い出させたのだった。

創世暦621年末、ルシオール救国同盟はグランヴェーネ帝国との間に一年の停戦協定を締結。帝国全土を巻き込んだ約一年半に及ぶ戦乱の日々は結果として両軍に多くの尊い犠牲を出し、その幕を閉じた。

終局から一月後、シルフレッタは皇帝代行という異例の立場で大陸中を渡り歩き、夫が起こした戦乱の爪痕をその眼に焼き付けて各国の王に謁見、謝罪し国交を再開してもらえるようにその頭を下げて乞うて巡った。

亡き狂皇とは対極のその姿勢に、はじめは謁見すら拒否していた王達も次第に帝国との平和の道を模索するようになっていった。

そして翌年、救世同盟の長となった聖王ジェナスは皇后シルフレッタを国に招聘、自ら世界を巡り尽力してきた皇后の姿勢に信を置き、停戦協定の無期限延長の決定を伝え即時の皇帝就任を促した。

創世暦623年、5代皇帝シルフレッタ戴冠。

帝国史上初の女帝国家の誕生であった。

以後シルフレッタの元、帝国内はその爪痕を残さないまでに復

興を遂げ、諸外国との貿易も再開、諸外国との繋がりも徐々に復活させていった。

時は流れて創世歴637年……

大陸の人々は、かつて一人の男が我欲のままに始めたその戦争を記憶の片隅に留めつつ、平和な日々生きていた。

それでも……

一度狂ってしまった歴史の歯車は軋む音を響かせながら、伝い伝って再び世界にその影を落とそうとしていたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1968w/>

エールヴェリオが泣いた日

2011年10月9日14時34分発行